
【特集】 D. グレーバーと自由への展望——〈労働〉と〈抵抗〉をめぐる(1)

特集にあたって

鈴木 宗徳

2020年9月2日、デヴィッド・グレーバーは59歳の若さで急逝した。大著『負債論』を世に問うてからわずか9年、彼は日々旺盛な活躍を続けるなかで旅立って行ってしまった。

グレーバーは、現在もっとも注目される人類学者であり、アナキストの立場からグローバル・ジャスティス運動やオキュパイ・ウォールストリート運動などを組織した活動家としても知られている。『アナキスト人類学のための断章』（原著2004）、『負債論』（同2011）、『官僚制のユートピア』（同2015）、『ブルシット・ジョブ』（同2018）などの主要著作をはじめ、今もつぎつぎと訳書が刊行されている。

グレーバーはニューヨークの労働者階級の家産に生まれ、父はスペイン革命に加わった経験を持ち、母も労働組合運動に参加していたという、ラディカルな環境のなかで育った。シカゴ大学のマーシャル・サーリンズの指導の下、マダガスカルフィールドワークに基づいた研究で博士号を取得している。グレーバーはマダガスカルで、地方政府が機能しなくなってもなお人々が直接民主主義によって社会を成り立たせていることを目の当たりにし、人類学とアナキズム思想を接合させてゆく。彼は『負債論』のなかで、マルセル・モースの互酬性の理論を受け継ぎながら、彼のいう「基盤的コミューニズム」について説明している。グレーバーにとってコミューニズムとは、隣の人に「ランチを取ってくれ」と頼むような見返りを期待しない助け合いを意味し、資本主義社会を含むあらゆる場所で日常的に行われているものとされる。これは「各人はその能力に応じて貢献し、その必要に応じて与えられる」という意味でのコミューニズムに他ならないが、生産手段の所有とは無関係で、むしろクロポトキン以来の「相互扶助」を言い換えたものと考えてよい。

同書においてグレーバーは、貨幣は市場による平和的な交換ではなく負債という不平等な力関係から出現したと述べ、負債とそれを強制する国家装置は、債務者に自分のせいだと思わせるための効果的な方法であると論じている。この著作が公刊された年、彼は、新自由主義と緊縮財政によって負債を負わされた若者とともにオキュパイ・ウォールストリート運動の創始に加わっている。この運動は、リーダーやヒエラルキーの存在を拒否する水平的・分散的な直接民主主義を徹底し、自己組織化や相互扶助といったアナキズムの原理に基づいて、ゼネラル・アセンブリーとワーキング・グループによる合意形成を導入した。グレーバーはこうした運動を、抗議者が「すでに自由な社会に生きているかのごとくふるまう」ことによって来るべき社会を垣間見させるという意味で、「予示的政治 prefigurative politics」という概念で説明する。これは、抵抗運動を権力奪取の手段としか見なさない考え方と対比されるものである。

グレーバーはこの運動を次のように説明している。

「最もわかりやすいのは、要求を掲げるのを拒否することによって、きわめて自覚的に、そうした要求が前提としている既存の政治秩序の正統性を否認したことであった。アナキストはこれを抗議と直接行動の相違として説明する。つまり、抗議はそれがどれだけ戦闘的であろうと、権力機構のふるまいを改めさせるための要求活動にすぎない。他方で直接行動は、それがコミュニティ内のオルタナティブな教育システムの創設であろうと、法律を無視した塩の製造（ガンジーの有名な塩の行進が実例）であろうと、あるいは集会封鎖や工場占拠の試みであろうと、まるで現在の権力構造が存在しないかのように行動するところに核心がある。直接行動とはつまるところ、すでに自由であるかのごとき行動を対抗的に示すことなのである」（『デモクラシー・プロジェクト——オキュパイ運動・直接民主主義・集合的想像力』木下ちがや他訳、2015年、航思社、275頁、傍点は引用者）。

ここで「抗議」と呼ばれる一般的な運動が権力奪取や政策実現といった目的達成のための手段であるのに対して、アナキストが実践する直接行動すなわち「予示的政治」においては、あたかも権力が存在しないかのように自由に振る舞ってみせることが目的とされる。水平的な直接民主主義による合意形成だけではない。オキュパイ運動が行われたズコッティ公園には、共同で食事をとる場所や、図書館やメディアセンターが設けられたことが知られている。こうしたコミュニティ内での相互扶助的な実践を通して、「来るべき社会を垣間見させ」ようとするのである。

グレーバーは、オキュパイ運動をふり返って次のように述べている。「私が惹きつけられたことは、……『人に役に立つことをしたい、人の世話をしたい』と言っている、その割合です。何らかの教育者や社会サービスの提供者などになりたいと。同時に彼らのほとんど全員が、もしホモ・エコノミクスにならうとしなければ、借金漬けになってしまい、自分の子どもの世話すらできなくなるだろうと考えていました。思うに、これが、彼らがオキュパイでキャンプ——ケア共同体のイメージ——をはり、それが革命的である理由なのです」（『改革か革命か——人間・経済・システムをめぐる対話』三崎和志・新井田智幸訳、2020年、以文社、70頁）。彼のこの発言には、「ブルシット・ジョブ」に就くのではなく）ケア、すなわち相互扶助の共同体を自ら形成したいと考える人々への共感が見てとれる。グレーバーにとってコミュニズムはすでに存在し、したがって目指すべき解放への道筋も「今・ここ」において自律的に形成しうるものなのである。

グレーバーは、この運動を「ガンジー主義的戦術の成功例」と評価し、それはガンジー主義的な非暴力運動は、政治の暴力性を暴き出すことによってそれとの「明確な倫理的対比関係をつくりだす」からだとして述べている（前掲『デモクラシー・プロジェクト』82頁）。権力側はオキュパイ運動に暴力と頹廢の巢窟であるというレッテルを貼ろうとしていたが、アナキズムが実現するコミュニティが逆に「倫理的」でありうることに、グレーバーは信頼を寄せているのである。

この特集では、グレーバーが展望した自由や解放への道筋について、具体的な事象に即して論じてゆく。特集は2号にわたり、本号ではいわゆる「抵抗」運動と、日常における相互扶助的な「抵

抗」の実践のなかに、グレーバー的なものを読み取ろうとする論文が収められる。グレーバーの遺産をどのように引き継ぐかを検討することを通して、抵抗、そして直接行動、アナキズム、不服従などの意味について考えてみることにしたい。

（すずき・むねのり 法政大学社会学部教授／法政大学大原社会問題研究所副所長）